# 10回目の節目を迎えた スマートクルーズアカデミーの挑戦

## 特別シンポジウムの開催を受けて

大阪大学国際公共政策研究科教授
**赤井　伸郎**
スマートクルーズアカデミー事務局
**竹中　一真**

### 日本のクルーズマーケットの背景

昨年クルーズ船で日本を訪れた外国人数は、前年を大幅に上回る199.2万人となった。国内の港のクルーズ船寄港回数も2,000回を超え、港に巨大なクルーズ船が停泊する光景も当たり前になりつつある。「クルーズは時間とお金に余裕のある老後の楽しみ」といったイメージは、ファミリー向けのコンテンツや設備が充実した外国籍の巨大クルーズ船の登場により、ここ数年で大きく変わった。一日一万円以下で楽しめるカジュアルなクルーズや長期休暇を取りづらい働く世代に合わせたショートクルーズも用意され、クルーズ旅行は若年層やファミリー層にとっても身近な存在になった。しかし、日本発着クルーズの乗客における若年層やファミリー層の割合は、欧米のカリブ海クルーズや地中海クルーズと比べると、まだ圧倒的に少ない。日本での更なるクルーズ活性化やクルーズ文化の定着には、次世代のクルーズ客となる若い世代の視点から、自由に議論することが重要である。

### スマートクルーズアカデミーの背景

スマートクルーズアカデミー（以下、SCA）は、船社の協力のもと、大学生が実際にクルーズに乗船し、船上という日常とは異なる環境で国際関係や地域発展に関する議論やプレゼンテーションを行い、また船上や各寄港地で様々な体験や交流をすることで、学生の論理的思考力の向上や国際感覚の醸成を目的としている。2012年から継続して実施し、昨年9月に10回目を迎え、累計参加者数はのべ300名を超えた（共同開催の「研修クルーズ」（全国クルーズ活性化会議主催）への参加者を含む）。SCAを通して若いうちからクルーズを体験することで、クルーズを身近に感じてもらう機会を創出することに加え、クルーズ乗船後には毎回100ページを超える参加学生の体験記を取り纏め、船社や行政に若い世代の視点からフィードバックしており、若者のクルーズ振興においても意義のある活動である。

### スマートクルーズアカデミー特別シンポジウム：学生視点でのクルーズ振興策

今年1月21日には、開港150年を迎えた神戸において、10回目の節目を迎えたSCAの特別シンポジウムを開催し、日本寄港クルーズを展開する船社の日本代表や国交省港湾局クルーズ振興室からゲストを迎え、改めて次世代のクルーズ文化定着へ向けた議論を行った。

シンポジウムは、2部構成で行われた。第1部では、船社の日本代表より、各船社のアジアでの展開および、日本のマーケット拡大に向けた取組が、また国交省港湾局クルーズ振興室からは、国の政策が説明された。第2部では、これらの取組を踏まえた上で、過去のSCA参加青年を代表して5大学（大阪大学、甲南大学、東京工業大学、東洋大学、兵庫県立大学）の学生が、クルーズ振興策を提案した。その後、その実現性や課題について、ゲストと学生が登壇し、パネルディスカッションにおいて意見交換を行った。若者への広報戦略が課題と考えた学生からは「若者に人気のユーチューバー（You Tubeに動画をアップし情報発信するクリエーター）を活用し、例えば大食いで注目されているユーチューバーに船内の料理を食べてもらう企画はどうか」という提案が寄せられた。学生の間では興味を持った動画をSNSで友達

写真1　スマートクルーズアカデミーの紹介

写真2　多くの参加者

写真3　学生によるクルーズ振興アイデア発表

写真4　クルーズ船社日本代表と学生のパネル討論

とシェア（共有）したり、後日友達との会話の話題にしたりすることも多く、録画をしなくても検索すればすぐに同じ動画が見られるYou Tubeの活用は、「若者に向けた情報発信ツールとして効果が高い」という学生ならではの実感から生まれたアイディアである。また、実際にクルーズに乗船する中で、船内イベントを告知するスケジュール表を見ても、若者が楽しめるイベントがどれか分かりづらく、見逃してしまうことがあるとして、スケジュールの記載の仕方や船内での告知方法の具体的な改善案を提案した学生もいた。

ゲストからは、いずれの提案に対しても「これまで考えてもいなかった視点からの提案で目からウロコ」だとして、「費用面も含めて検討し、できることからすぐに取り組みたい」との声が寄せられた。また、クルーズに興味をもった人が実際にクルーズを「プチ体験」できる企画として、「寄港中の船内でランチができるツアーを企画する」という提案に対しては、「現行の法律では関税の関係上、実現には課題があるものの、クルーズ人口の拡大に向けて行政も後押しし、産官が連携して解決して欲しい」との声に、国交省のサイドとも解決に向けて検討すべき課題であるとの認識を共有できた。

ゲストの講評では「自分たちの長年の経験から当たり前と思っていることが、学生の視点からは全く異なっており、斬新で新たな示唆を得られた」との声が多く寄せられた。学生ならではの目線が次世代のクルーズ文化定着やクルーズ業界の活性化に大きく寄与できる可能性を改めて感じることができた。また、参加した学生にとっても、自らの経験や調査から提案をまとめ、それを実務で携わる船社や国交省のゲストと真剣に議論し、高い評価を得られたことは、大きな自信となり、将来に活きる貴重な経験となっただろう。さらに、参加した学生からは、「他大学の学生の発表や議論の仕方から勉強することも多く、大きな刺激となった」という声も寄せられた。なお、シンポジウムの後には、全員参加で、クルーズに関するクイズ大会も行われ、今後に向けた、参加者同士の交流も深めることができた。

SCAは、社会貢献活動の一環として船社に御協力頂き、行政や大学からの金銭的な援助なしに運営をしてきた。今後も船社への若い視点からのフィードバックを引き続き行い、船社にとっても実施のメリットを感じてもらえるようにすることで、無理のない範囲でSCAの活動を継続させることが必要である。

また、SCAの今後の展望として、外国に寄港するという外国籍のクルーズ船の特長を活かし、海外の寄港地の大学と連携したディスカッション企画や英語でのプレゼンテーションをプログラムに盛り込み、より実践的な学びの場を提供することや、SCAへの参加を大学の課外講義として単位認定することで、より多くの学生が参加したいと思えるような仕組みの整備も検討していく。

日本人が普通にクルーズを楽しむ時代が来れば、日本のレジャーのスタイルも大きく変わるであろう。日本の港湾や地方都市に定期的にクルーズ船が寄港し、地方の楽しみ方の幅が広がる。それが、地域の活性化につながる。このような新しい時代を生み出すためにも、若者の新たな視点を取り入れ、国・地方自治体・民間が課題を認識し、連携して解決に取り組むことが重要である。今後もSCAはそうしたきっかけを作る存在になれるよう、この挑戦に引き続き取り組んでいきたい。

写真5　シンポジウム後のクルーズクイズ大会